

多様な防御施設を持つ“難攻不落”な山城の調査

みなみやま
南山城跡

かわべ かないばら
倉敷市真備町川辺・船穂町柳井原

小田川合流点付替え事業に伴って、平成30年4月から本格的に南山城跡の発掘調査を実施しています。南山城跡は小田川と高梁川に挟まれた低丘陵上に立地し、中世の山陽道にも近いことから水陸交通路の要衝に築かれた城と考えられます。城跡の発掘調査はこれまで城の中心である曲輪くるわと北半部を中心に行ってきました。城跡は約110m四方と小規模ながら、曲輪に加え、櫓台やぐらだい、土塁、虎口とらぐち、切岸きりぎし、横矢よこや、堀切ほりきり、塹壕たてほり、畝状塹壕群うねじょうたてほりぐんなどの多様な防御施設が設けられていることが分かり、堅固な構造をもつことが次第に明らかになってきました。



南山城跡の遠景（北西上空から）

曲輪は中央の土塁を挟んで東西に分かれています（写真1・図1）。東側の曲輪①は城兵が駐屯するため、約25m×24mの広い平坦地になっており、一部が厚さ約3mの盛土によって造成されています。この曲輪では中央北側で掘立柱建物、中央の土塁⑤の東裾で南北に並ぶ4つの柱穴を確認しました。また、曲輪の中央と東端では計7か所で集石が見つかりました。一方、西側の曲輪②は約36m×12mの平坦地で、西端中央に櫓台④が設けられ、その南北に土塁⑥が延びています。曲輪②の北側と南側には出入口の虎口⑦⑧があり、このうち虎口⑦から鍵形に折れて東側の曲輪①へと通じています。また、この箇所には礎石が確認されたことから、門が建てられていた可能性があります。さらに、南側の虎口⑧や土塁⑥の南西側では、投石（つぶて石）を集めた地点が5か所で認められました。城の北部では、曲輪の北側で急斜面の切岸⑨、曲輪の東西端で横矢⑩⑪、西側の尾根で3条の堀切⑫、北斜面で複数の豎堀⑬を確認しました（写真2）。横矢は曲輪の縁辺を折り曲げた複雑な構造で、二方面から敵を攻撃できるように工夫されています。また、西側から3つ目の最も規模の大きい堀切は、幅約5.8m、深さ約2.8mで、その北端の両肩には土塁があります（写真3）。さらに、堀切の東側に造られた豎堀は、断面形が「V」字形（薬研堀）で幅が約2.6m、深さが約3.0mもあります。さらに堀切や豎堀の東側の北斜面では幅1m前後の通路⑬を確認し、西側の曲輪にある北側の虎口⑦までつづら折りになって続いていることが分かりました。

出土遺物として、曲輪を中心に天目茶碗、青磁、白磁、備前焼の播鉢、瓦質土器の鍋・羽釜・播鉢、土師器の皿、銅銭、石の硯、瓦、土製の錘、鉄製品などの多様な遺物が出土しています。これらの遺物の内容や出土量から、城内で将兵が一定期間生活しており、少なくともこの城は16世紀後半に使用されていた可能性があります。南山城は当時の文献史料による記録がなく、築城時期や築城主体はよく分かっていませんでしたが、調査によって、城の規模や構造、城内での生活の様子などが具体的に明らかになりつつあります。（後藤寛子）



写真1 曲輪（北東上空から）



写真2 北西側の堀切と豎堀（南西から）



写真3 最も規模の大きい堀切（北から）

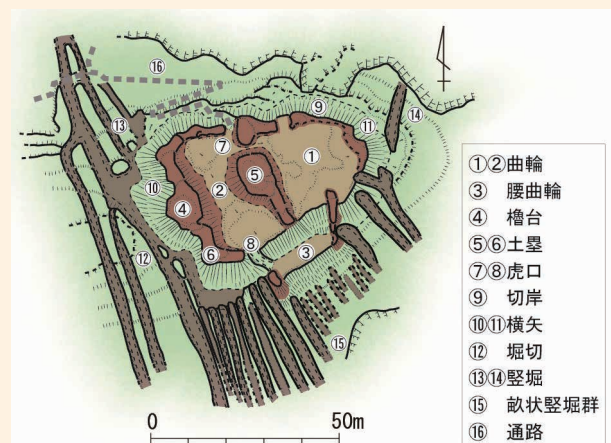


図1 南山城跡の縄張り図（1/2,000）

一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴い、細畝古墳群の調査を行いました。

細畝古墳群は、皿川を見下ろす丘陵尾根の突端に築かれた3基の円墳からなり（写真1）、いずれも6世紀後半から7世紀前半にかけて造営されたと考えられます。

1号墳は直径約10mで、南に開口する無袖式の横穴式石室を持っています（写真2）。石室からは板石を組み合わせた石棺のほか、表面に矢羽根のような文様を刻んだ特徴的な陶棺が見つかりました。副葬品として、須恵器や土師器、鉄鏃のほか、水晶製の切子玉や、メノウ製の勾玉などの玉類が出土しています。

2号墳は直径約10mで、1号墳の北東に位置しています。東に開口する無袖式の横穴式石室を持っていますが、天井石は失われていました（写真3）。石室からは陶棺がバラバラの状態出土したほか、鉄釘が出土しており、陶棺以外に木棺が納められていたことが分かります。副葬品として、須恵器や鉄鏃のほか、碧玉製の勾玉などの玉類が出土しています。

3号墳は直径約12mで、2号墳の南東に位置しています。南東に開口する片袖式の横穴式石室を持っていますが、天井石と玄室奥側の石の大半は失われていました（写真4）。床面も攪乱を受けていましたが、玄室内に落下していた天井石の下などは良好な状態で残っており、玄室奥側の床面には直径15cmほどの扁平な礫が、それよりも外側の床には板石が敷かれていました。石室内からは鉄釘が出土しており、木棺が使われていたことが分かります。副葬品として、須恵器や土師器、金銅製の耳環や玉類のほか、轡などの馬具が出土しています。

これらの調査成果を公表するため、11月13・14日に現地説明会を開催し、2日間で120名の参加がありました。（藤井翔平）



写真1 細畝古墳群全景（南から）



写真2 1号墳石室（北から）



写真3 2号墳石室（東から）



写真4 3号墳石室（北西から）

津島遺跡文化財講座「争乱の考古学」

県立博物館講堂において、「争乱の考古学」と題して全3回の講義を行いました。弥生時代から近・現代にいたる「争乱」について、武器や武具、城跡などを取り上げ、考古学的な視点から解説しました。

争乱の考古学 第1回 9月29日（土）

講義1「弥生時代の戦い」 主 任 石田 爲成

弥生時代の初めに朝鮮半島から北部九州に武器や戦いの知識が伝わってきました。吉備でも守りを固めた集落や、武器を伴った墓など、戦いの証拠が見つかっています。弥生時代の後半には、各地で戦いが拡大し、「クニ」のような大きな地域のまとまりが形成されたと考えられます。

講義2「古墳時代の武装」 総括副参事 尾上 元規

古墳時代の武装は、中期（5世紀頃）に大きく発達しました。古墳には多くの刀剣類や弓矢、甲冑かゆうなどが副葬され、この時期に出現する馬具、すなわち乗馬も、主に武装の一部として普及しました。その背景には、朝鮮半島の動乱とそれへの軍事参加、先進技術の導入が考えられます。

争乱の考古学 第2回 11月25日（日）

講義1「古代の山城」 参 事 大橋 雅也

北部九州、瀬戸内海沿岸、近畿に築かれた古代の山城について、鬼ノ城きのじょうの発掘調査成果とともに紹介しました。これら古代山城の築城と古代山陽道など官道の整備は軍事と情報を掌握し、律令国家成立に大きな役割を果たしたと考えられます。

講義2「中世の城と館」 副 参 事 物部 茂樹

武士の世になり將軍の権威が失われてくると、自らの力で領地を治める戦国大名や国人こくじんが現れ、勢力争いを繰り広げます。彼らが築いた数多くの山城や館の特徴を抽出して、文献などの情報と照らし合わせて考えると、合戦の様子や当時の社会像をより具体的に復元できます。

争乱の考古学 第3回 2月23日（土）

講義1「近世の城と城下町」 課 長 高田恭一郎

石垣と堀に守られた城内に、天守や櫓などの瓦葺きの建物が建ち並ぶ近世の城は、軍事的防御機能の到達点であるとともに、見せる城でもありました。城の周辺には、家臣や町人が集住する広大な城下町が造られ、城と一体化して領国の政治と経済の中心として機能しました。

講義2「発掘された戦跡」 副 参 事 岡本 泰典

近代の戦跡（戦争関連遺跡）にスポットを当て、各地の調査成果を紹介しました。戦争体験者が減少していく中、戦争の記憶を将来に継承していく上で、文献史料や証言と並んで戦跡の考古学的な調査研究も重要であることを指摘しました。



会場の様子



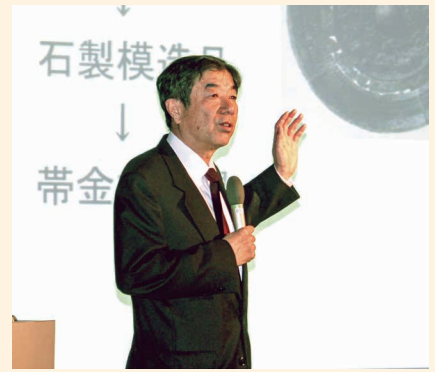
岡山城

講演会『初期国家形成期の武装』

平成31年1月20日（日）、県立美術館で講演会「初期国家形成期の武装」を開催しました。講師には、山口大学人文学部教授の田中晋作さんと、京都大学白眉センター特定助教の金宇大さんをお迎えし、県内外から約150名の方々に来場いただきました。今回のテーマは、古墳時代の社会が国家へと成長していく過程を、武装の変化から読み解こうというものです。

田中さんには、「古墳時代の政権交替と軍事」というタイトルで御講演いただきました。政権交替の誘因の一つが朝鮮半島との関係であると説かれ、古墳時代中期になって新たに政権内の主導権を得た百舌鳥・古市古墳群の勢力が、渡来人・渡来系勢力を組み込んで移動や駐留に対応できる大規模な軍事活動を可能にしたことを、古墳に副葬された武器組成の変化から論じられました。

金さんには「初期国家形成期における装飾付大刀所有の意味」というタイトルで御講演いただきました。古墳時代後期の装飾付大刀は、武器としてよりも所有者の権威を象徴するものとされています。この装飾大刀の一つである三累環頭大刀の分析から、所有者は新羅との外交を職掌とする人物と結論付けられました。多様化する装飾大刀の背景には、様々な職掌の存在があることを指摘され、そこに古墳時代の社会機構の発展過程を読み取ることができると論じられました。（團 奈歩）



田中晋作さん



金宇大さん

平成30年度の企画展

平成30年4月17日（火）から9月30日（日）まで、企画展1として「須恵のうつわもの」と題した展示を行いました。須恵器は、古墳時代中頃（5世紀）に朝鮮半島から伝来した技術で作られた硬い焼き物です。その後、須恵器は徐々に各地に普及し、岡山県内でも古墳時代後期（6世紀）から平安時代にかけて、さかんに生産されました。古代の人々にとって身近であった須恵器について、年代・用途・製作技法など様々な観点から、その見方について紹介しました。

また、平成30年10月10日（水）から平成31年4月14日（日）までの予定で、企画展2「吉備の古瓦を読み解く—中四国最古の瓦から国分寺まで—」と題した展示を行っています。6世紀末の飛鳥寺（奈良県明日香村）造営を機に作り始められた瓦ですが、岡山県では7世紀前半に生産が始まっており、中四国でも早い時期に瓦づくりが導入された地域といえます。その後、7世紀末には多くの寺院が建立され、8世紀の国分寺・国分尼寺造営に至るまで、多様な文様をもつ軒瓦が堂塔の薨を飾りました。今回は、岡山県内でも特に備中地域の寺院跡や窯跡から出土した瓦などを展示して、地域における瓦生産のあり方や都とのつながりについて考えてみました。（河合 忍）



企画展1の様子



企画展2の様子

ふるさとの山城探訪

12月8日（土）、山城を巡りながら城の構造や、歴史について学ぶ「ふるさとの山城探訪」を開催しました。今回は、下津井港と備讃瀬戸大橋を間近に望む倉敷市の下津井城跡（県史跡）を訪ねました。下津井城は姫路城主池田輝政の実弟にあたる長政の手により、慶長9～11（1604～06）年にかけて修築されました。これは徳川家康の意を受けてのことだとも言われています。

約40名の参加者はセンター職員から説明を受けながら、本丸などの曲輪を見学しました。石垣や土塁、土橋などの施設を組み合わせることで効果的な防御線とした縄張りや、場所あるいは時期によって異なる石垣の積み方など、近世山城の特徴について知っていただく機会となりました。

その後は、下津井節が演奏される資料館を訪れたほか、倉敷埋蔵文化財センターにうかがい下津井城跡から発掘された瓦や陶磁器を見学しました。

参加者の皆さんには城跡の見学に加え、出土品を見ていただいたことで、下津井城に関する理解をより深めていただけたと思います。（和田 剛）



土橋を渡る



三の丸石垣を見学する

中世城館跡総合調査

6年目となる今年度は、備中を中心とする新見市、高梁市、倉敷市、浅口市、早島町に所在する195か所の城館を対象に調査を行いました。

備中では戦国時代に入ると守護である細川氏の威勢に衰えが見えます。以後、北からは尼子氏、西からは毛利氏、東からは宇喜多氏、そして羽柴氏を先方とする織田氏などの大勢力が進出してきたため紛争が絶えませんでした。さらに在地有力国人層である庄氏や三村氏、中島氏などがこれに加わり、そのほぼ全域が戦場となりました。特に天正2～3（1574～1575）年に勃発した「備中兵乱」で、三村氏が非業の最期を遂げたことはよく知られます。

今年度の調査では、「兵乱」の舞台となった備中松山城跡・鶴首城跡・国吉城跡（高梁市）、樫城跡（新見市）や発達した防御施設を持つ黒山城跡（倉敷市）などの縄張り図を作成し、これら城跡に関する文献史料や地名についても調べました。また、調査成果を紹介したパンフレット「攻略！おかやまの中世城館 第五巻（備中国南部編）」を刊行しました。

今年度で現地調査がほぼ終了し、来年度は成果をまとめた報告書の作成と刊行を行う予定です。（和田 剛）



備中松山城跡の調査風景



黒山城跡の土塁

津島やよいまつり

10月27日（土）・28日（日）に、岡山市北区の岡山県総合グラウンド内にある津島やよい広場と遺跡&スポーツミュージアムを会場として、津島やよいまつりを開催しました。早いもので今年10年目を迎えました。

会場では、勾玉づくり・火起こし・石包丁による稲穂の収穫・木の臼と杵を使った粳すりなど、弥生時代の生活体験コーナーと、弥生人に変身して写真を撮ったり、津島遺跡に関するクイズラリー、レプリカを使った土器の復元体験など、弥生時代を身近に親しんでもらうコーナーを用意しました。

弥生時代の生活体験のなかでは火起こしが一番人気で、「一度してみたかった」と嬉しそうに話される方が多くいました。弥生人に変身して写真を撮るコーナーでは、貫頭衣を着用して弓や槍を構えるポーズを決めた時の笑顔が印象的でした。クイズラリーの参加者には、オリジナル缶バッジまたは職員が作成した勾玉や、小さなレプリカ鏡をプレゼントして、喜ばれました。二日間とも晴天に恵まれ、大勢の方に来場していただきました。小さいお子さんからご年配の方まで、楽しみながら津島遺跡を知っていただく機会になったことと思います。（團 奈歩）



火起こし体験



粳すり体験

「おかやま 考古学探検」を刊行します

センターでは、小学6年生から始まる歴史学習の場として、年間約2,000名の小・中学生を、センター施設や津島遺跡の見学等に受け入れています。教科書に載っている弥生土器や石包丁などの実物を実際に手に取って重さや手触りを体験したり、復元した竪穴住居に入り内部の構造や広さなどを実感したりするなど、実体験を通して歴史を身近に感じてもらうプログラムは毎年好評です。

このたび刊行する『おかやま 考古学探検』は、センター施設や津島遺跡を見学する小・中学生を対象に作成しました。見学時の補助資料として活用いただくとともに、センターの役割である「埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録を後世に残し、調査で明らかとなった郷土おかやまの歴史を県民に分かりやすく伝える」ために、どのような業務を行っているのか、多くのイラストや写真で紹介しています。また、県内の重要な遺跡を「岡山県のおすすめ遺跡」として紹介し、近くにある遺跡を調べる方法を解説するなど、歴史に興味を持ち始めた小・中学生が、自発的に考え探求する力を伸ばすことができる内容となっています。（松尾佳子）



小学生による津島遺跡見学



「おかやま 考古学探検」

◆ 岡山藩の重臣が眠る場所

山陽自動車道のインターチェンジや岡山空港へのアクセス道路が整備され、岡山市街地の玄関口として近年にぎわいを増している津高地区。その西方にある大岩山の頂きには、かつてここを采地とした岡山藩重臣池田家の墓所がありました。初代の池田武憲（内膳、1650～1690）は、藩主池田光政の従弟にあたり、禄高四千石の番頭として家老に次ぐ地位を占めました。武憲はまた、熊沢蕃山の娘を娶り、家門の重臣として出頭人の津田永忠と鋭く対立したことでも知られています。武憲は嗣子なく没しましたが、家老の日置家や森寺家などから養子を迎え、その家名を繋いでいます。

さて、東西55m、南北24mにわたり土堀で囲んだこの墓所には、武憲から6代にわたる当主夫妻のほか、武憲の義弟にあたる蕃山継明夫妻が葬られています。平成4年、山陽自動車道の建設に先立って墓地の移転が行われた際、二段の台石に円頭の棹石を載せた墓石の下から多数の墓誌が掘り出されました。一辺1m余りの花崗岩2枚を被せ蓋にした墓誌には、墓主の出自や功業を藩儒の撰文により刻んでいます。当主はいずれも60cm四方の座棺を用い、朱熹の「家礼」に従って丁重に葬られていました。とりわけ池田森英（志津摩、1720～1780）の棺は、二重の木柩（木箱）に納めて隙間に石灰・粉炭を充填し、粗炭で囲んだ上を三和土で覆って7mもの地下深くに葬られていました。棺内の副葬品には、大・小の刀や文房具・喫煙具・化粧道具などがあり、上級武士の暮らしぶりをしのばせます。

このように大岩墓所は、藩主池田忠雄墓に次ぐ発掘例として、岡山藩の葬制をうかがわせる貴重な資料となりました。現在、墓石や墓誌の一部は山陽自動車道の南隣に移設され、かつての采地の変わりゆく姿を静かに見守っています。（亀山行雄）



木炭と石灰に囲まれた座棺



移設された墓石と墓誌



編集・発行

岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-0136 岡山市北区西花尻1325-3

TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142

<http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>

● 交通案内 JR山陽本線庭瀬駅下車徒歩40分

JR桃太郎線吉備津駅下車徒歩25分

● 業務時間 AM8:30～PM5:15

● 休業日 土・日曜日及び祝日、年末・年始

● 展示室の開館 AM9:00～PM5:00

年末・年始を除き、土・日・祝日も開館しています。
ただし、臨時に休館することがあります。